

学友会群馬県支部だより

令和2年1月

台湾に生きた明治日本人の精神

拓殖大学前総長
現 学 事 顧 問 渡辺利夫先生



日清戦争に勝利した日本は、明治27年から昭和20年までの50年間、台湾を統治した。しかし列強諸国は、新興国日本の植民地統治能力に疑問を持っていた。本学の第三代総長も務められた後藤新平が台湾総督府の民生長官に就任すると、日本から多くの逸材を台湾に招聘した。それは後藤が台湾を、「台湾をただたんに日本に利益を供給する植民地」としてではなく、「新興国日本と同等に、文化国家として育てよう」とする政策を打ち立て実行したからだ。当時のアジアは『貧困地域』の代名詞で、台湾も質の良くない米しか生産できず、人々は生きていぐのに精一杯だった。

こうした台湾の稲作を苦難の末に、米の品種を改良して現在の豊かな地域に変えたのが、農学者の磯栄吉だ。磯の功績

は、のちに欧米の学者たちが『グリーン・リボリューション』と絶賛したほどで、もし磯がいなければ、台湾は現在の北朝鮮のような食糧不足に陥っていたかもしれない。

もうひとり忘れてはいけないのが、水利技術者の八田與一だ。台湾は南北の真中を分断するように北回帰線が通っている。その北側は亜熱帯地域で、南側は熱帯地域に区分されている。南側の熱帯地域は、雨季と乾季という二つの季節しかない。雨季は田畠が水没し、乾季は乾いた硬い地面に変るという、農業には適さない地域だった。その地域を一変させたのが、烏山頭ダムだ。八田は、難工事だったこのダムの建設を、彼の生涯を獻じて遂行し完成させた。今もダムが一望できる地に八田の銅像があり、地元の人々によって大切に守られている。

この二人をはじめ多くの偉人がかつての台湾で活躍したが、台湾の方々はご存知でも、日本人はまったく知らないのは誠に残念だ。今のような時代だからこそ、その国の人々の幸せのために尽力した日本人を再評価すべきではないだろうか。

(記 小野里)



SISAY の演奏



会 場 の 様 子



熱のこもった講演に 200 名程の聴衆が感動

(令和元年9月1日 高崎市 ホテルエテルナにて講演)